



『狩女のすすめ』

ジビエふじこ／著
緑書房

猪や鹿などの肉を、おいしく食べるだけが

ジビエではない！「ジビエの伝道師」とも呼ばれる著者の半生とともに、多様な楽しみ方を知ってみませんか？

『翻訳できない世界のことば』

エラ・フランシス・サンダース／著
前田 まゆみ／訳 創元社

言語が変わるとうまく言い表せない「翻訳できないことば」を集めて紹介。その国特有の文化や習慣、感性からできた言葉もあり、広い世界の様々な価値観を私たちに教えてくれます。



『なぜ、おかしの名前はパピプペポが多いのか？ 言語学者、小学生の質問に本気で答える』

川原 繁人／著 ディスカヴァー・トゥエンティワン

著者が小学校で行った特別授業を書籍化。そもそも濁点や半濁点って何？ なぜお菓子の名前にパピプペポがつくものが多いの？ など、身近な例から言葉への理解を深めることができます。

『目の見えない白鳥さんと アートを見にいく』

川内 有緒／著
集英社インターナショナル

目の見えない人とどうやってアートを見るの？触ってみるの？いえいえ、一緒におしゃべりしながらアートを見るのって本当に楽しいんです。さあ！一緒に未知のアートの世界へ！

『プーと私』

石井 桃子／著 河出書房新社

翻訳家、編集者として、外国の児童文学を日本に紹介してきた石井さんの随筆集。外国に赴いて、作品、作家、児童図書について探求し、視野を広げて行く石井さんの姿が、凛として心地良い。

福岡市図書館マンス 2025

図書館

知識ひろがる
世界もひろがる

ひろがる



福岡市図書館司書のおすすめ本



福岡市の図書館では、毎年、読書週間のある10月を「福岡市図書館マンス」として、分館も含めた全館で、展示・イベントを行っています。今年の統一テーマは、「ひろがる図書館」です。

『時代を撃つノンフィクション100』

佐高 信／著 岩波書店

自分の知らない世界について教えてくれるノンフィクション。この本では100冊の作品が紹介されています。問題意識を持つこと、視野を広げ、思考することの重要性に気付かされます。

『人生を面白くする本物の教養』

出口 治明／著 幻冬舎

知識を幅広く吸収し、教養を深めるのは、楽しく悔いのない人生を送るために必要であると気付かされます。そこで著者が自身の経験に基づき、教養を身につける具体的方法を伝授します。



『自分で「始めた」女たち 「好き」を仕事にするための最良のアドバイス &インスピレーション』

グレース・ボニー／著 月谷 真紀／訳 海と月社

個性的で才能溢れる112人の女性をインタビューと写真で紹介した本。職業も様々な彼女達、その生き様のなんと鮮やかなこと！力強いアドバイスに目から鱗が落ちるかも。

『Simply AI : Facts Made Fast』 DK Publishing

AIとは何か、どのように機能するのか、私たちの生活にどのような劇的な変化をもたらしたのか、将来どのように進化する可能性があるのかを明瞭な図解と分かりやすい文章で解説します。

『教養としてのミイラ図鑑 世界一奇妙な「永遠の命」 ミイラ学プロジェクト／編著 ベストセラーズ』

ミイラ＝エジプトのイメージが強いミイラの世界。しかし世界中にミイラは存在し、それぞれの時代の文化や社会を覗くことができます。本書とともに、いざ、ひろがるミイラワールドへ！

『定年後年金プラス、 ひとの役に立つ働き方』

杉山 由美子／著 朝日新聞出版

お金だけでなく、世のため、人のため、自分のために働く。写真家、ネット書店、社労士など、新たなスタートを切った中高年を紹介。あなたも人生の可能性をひろげてみませんか。

『人生が変わる紙片づけ！ お金が貯まる！時間も増える！』

石阪 京子／著 ダイヤモンド社

紙の片づけ、実はとっても重要です。放っておくとトラブルになることも。取捨選択＋データ化のコツを学び、トライしてみませんか？時間とお金に余裕が生まれ、生活が変わるはずです。



『日本の化粧の変遷100年』

資生堂ビューティークリエイションセンター／監修
玄光社

各時代の流行メイクを再現した写真やイラストで目にも華やかな1冊。当時の世相の解説コラムも掲載で充実の内容です。“昭和100年”の今年、時代を映す化粧の歴史を振り返ってみては。

『すばらしい人体 :あなたの体をめぐる知的冒険』

山本健人／著 ダイヤモンド社

人体の構造、医学の歴史、現代医療や健康の常識など、驚きと感動のエピソードが詰まったサイエンス本。高機能な臓器たちのひみつを紐解いていくと、そこには神秘的な世界が。必読です！

『本のある空間採集 個人書店 ・私設図書館・ブックカフェの寸法』

政木 哲也／著 学芸出版社

消えつつある本屋ですが、間取りと絵から空想が膨らみます。お店巡りを日々の楽しみにしている人は多いと思いますが、著者の本屋への愛着を感じ、この本を片手に訪ねてみてください。